

## 潮流

日本小児科医  
会は平成十年  
に、子どもの心  
の問題に乳児期  
から取り組む小  
児科医を養成す  
る「子どもの心  
相談医」制度を  
設けました。昨  
年十月一日現在  
で、全国に千七  
十一人、鳥取県  
でも十一人が相談医となっていま  
す。私も平成十二年から「子どもの  
心相談医」となり、先日その研修会  
に参加しましたが、毎回全国から二  
百人以上の小児科医で満席となりま  
す。それだけ小児科医は、子どもた  
ちの心の問題に危機感を持っている  
のではないかと思います。そこで、  
母と子の絆(きずな)について考え  
てみたいと思います。

生まれたばかりの馬の赤ちゃん  
は、しばらくすると歩いて、お母さ  
んのおっぱいを飲むようになります  
が、人の赤ちゃんは歩くことはでき  
ず、自分で食べたり、飲んだりする  
こともできません。言葉を話すこともで  
きません。生物学的に早産で未完成  
な未熟な状態で生まれ、一年たって  
ようやく一人前に近づいていきま  
す。しかし、生まれたばかりの赤ち  
ゃんでも、お母さんの独特のリズム  
やピッチ、抑揚で、優しく、愛情を  
込めて語りかけると、うまくそれに  
引き込まれて、しだいに同調して手  
を動かすようになるエントレインメ  
ント(引きこみ同調現象)が確かめ  
られています。

話しことは(音声言語)に対して、  
手の動きや身ぶり、表情など体の動  
き(行動言語)のリズムが引きこま  
れるように同調し、人間としてのコ  
ミュニケーションがはじまります。  
このやり取りがあつてこそ、人間と  
して成長していくと考えると、「人  
は生物学的存在として生まれ、社会  
的存在として育つ」ことが理解でき  
ると思います。

お母さんは赤ちゃんを抱いて目と  
目を合わせて語りかけ、おっぱいを  
飲ませたりしていると、母性愛が生  
まれ、いとおしく優しい穏やかな気  
持ちになって、母親になった喜びを  
感じます。逆に赤ちゃんは、触覚、  
視覚、聴覚、嗅覚、味覚の五感を使  
つてお母さんを感じ取り、愛着が形  
成され、安心感と満足感のもとに、

NPO法人未来副理事長、鳥取県中部医師会副会長

松田 隆 赤ちゃんとのふれあい

最初の人間的な絆、母と子の信頼関  
係ができあがるのです。

言葉が獲得されるまでの乳幼児の  
コミュニケーションは、ボディラン  
グージや泣いたり笑ったり感つた  
りする感情表現、表情などの非言語  
的なコミュニケーションで母と子の  
絆は結ばれ、わが子をかわいと思  
うようになり、心を育てる第一歩と  
なります。妊娠中は「赤ちゃんが育  
っている」と感じていたお母さんも、  
生まれてくると「赤ちゃんを育てる」  
という感覚が変わり、子育てからし  
つけに力が入ってしまうことがあり  
ますが、子どもは育つプログラムを  
持って生まれることを忘れてはなら  
ないと思います。

現代は心の時代と言われ、人と人  
とのふれあい、コミュニケーション  
の大切さが言われています。しかし、  
その原点は赤ちゃんとのふれあいか  
ら始まるのだと思います。人は無防  
備、無抵抗な赤ちゃんに接すること  
で、優しさを取り戻し、相手の気持  
ちを理解します。少子化で、赤ちゃ



2007. 6. 8

んに一度も触れたこともなく大人に  
なっていく中で、赤ちゃんと小中高  
生との世代を超えたふれあい体験  
は、自分自身の絆を見つめなおし、  
命の大切さを知ることから相手を思  
いやり、自分を好きになる自尊感情  
を高めることにつながります。

県内でも湯梨浜町では「赤ちゃん  
の登校日」で小学五年生が赤ちゃ  
んとその親にかかわったり、境港市で  
も「赤ちゃん抱っこ授業」、大山中  
で「こんちには赤ちゃんふれあい会」  
などの取り組みが始まっています。

このような取り組みを全国に先駆け  
て始められた鳥取大学医学部総合医  
学教育センターの高塚人志准教授は  
「赤ちゃんはお父さんお母さんに抱  
きしめられるために生まれてくる」  
とおっしゃっています。倉吉市立東  
中学校では六月二十九日の学校公開  
授業に合わせて「赤ちゃんとのふれ  
あい会」が開催されます。ぜひ、子  
どもたちの目の輝きと笑顔に触れて  
みてくださいます。

(倉吉市)